

## フィリップ・メドウズ・テイラーの 『ラルフ・ダーネル』について

小西真弓

### 序

1865年に出版されたフィリップ・メドウズ・テイラーの『ラルフ・ダーネル』について、マンスクハニはこの小説を「純粋なインドについての小説と言うよりは、インドの幕間劇付のイギリス小説である」<sup>1)</sup>と批評している。確かに、ブラック・ホール事件やプラッシーの戦い等をかなり詳細に描いてはいるものの、インドよりイギリス本国に設定されている場面が多い『ラルフ・ダーネル』は、『シータ』や『ティッパー・スルタン』とは異なった趣をもつ小説である。イギリスにおける主人公ラルフの出生にまつわる物語の展開はいささか冗長であり、インドとは関わりの薄い人物を中心にしたエピソードも蛇足という印象を免れない。しかし、ラルフ・ダーネルのモデルが、ウォレン・ヘスティングズの軍事顧問で、デリーの王族出のイスラム女性 (Begum Fyze Baksh of Delhi) を内妻としたウィリアム・パーマー将軍 (General William Palmer, 1740-1816) であることや、<sup>2)</sup> ロバート・クライヴをはじめとする

歴史上の人物とラルフとの深い絆を考慮すると、この小説はやはりイギリス人がインドに植民地を築いた経緯を描いたアングロ・インド小説であると言えよう。本稿では『ラルフ・ダーネル』の荒筋を紹介しながら、イギリスとインドの関わり方に関する作者の問題意識等を考察してみたい。

### I

幼い時に両親を失ったとはいえ、ノーサンバランドのメルセペス邸を本拠地とするダーネル男爵 (ジェオフレイ・ダーネル) の男子相続人であるはずのラルフがインドへ渡るのは、事情を知らぬ周囲の人々にとって、意外な進路の選択のように思われる。幼少期の彼は、メルセペス邸で、従姉妹のコンスタンスと共に男爵夫妻によって大切に育てられ、上流階級の子弟として家庭教師から教育を受けるチャンスにも恵まれていた。15歳の時に彼がロンドンへ送られたのも、田舎の悪友を遠ざけ、より都会的なマナーや教育を身に着けたり、男爵の弟ロジャー・ダーネルの経営する商社会社で、ジェントルマンとしての職業能力

\*テキストには Philip M. Taylor, *Ralf Darnell* (1879; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1990) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

1) Gobind Singh Mansukhani, *Philip Meadows Taylor: A Critical Study* (Bombay: New Book, 1951), 150.

2) *Ibid.*, 152参照.

を開発するためであった。息子がいなかったロジャーにとっても、ラルフは一族の期待を担うべき唯一の存在であり、彼は田舎者嫌いの妻が嫉妬するほど、甥のつつがない成長に気を配る。また、ロンドンでラルフの身の回りの世話と語学教育を引き受けるのは、ダーネル家にゆかりのあるモートン夫人で、彼女も娘のシビルと共に彼を家族のように愛する。

このように傍目からは何の不自由もないような生活に恵まれながら、二十歳そこそこでラルフが飲酒や賭博に明け暮れ、モートン夫人の「手に負えない」ような放蕩者になるのは、18世紀半ばに故郷のカントリー・ハウスを離れてロンドンで気ままに暮らす御曹司にはありがちなことであり、それ自体は驚くに値しないであろう。孤児であるが故に、必要以上に可愛がられたラルフは、世間知らずで警戒心もなければ、自らの名誉や健康に対する配慮、自立心にも欠けていた。そのうえロンドンにあっては、ノーサンバランドで楽しんだ鱒つりもできず、思いを寄せる従姉妹のコンスタンスと言葉を交わすチャンスもない。そんな彼が金銭目当ての悪友によって酒場に引きずり込まれたり賭け事に夢中になるのも、不思議ではない。しかし更正のためとは言うものの、ラルフが突然インドへ送り込まれる羽目となる背景には、彼の出生の秘密という問題が潜んでいた。

ダーネル男爵もロジャー・ダーネルも、

弟ヘンリーの面影や性格をもつラルフは、自分たちの甥であると信じていた。しかしその昔、ヘンリーが両親の許可もなく、ダーネル家の徴税人スミズソンの娘グレースと「駆け落ち結婚」をしたことは、一族にとって不名誉であった。当初、男爵はグレースを弟嫁とは認めず、彼女にメルセペス邸の敷居をまたがせようとはしなかった。そのために気分を害したヘンリーは、ラルフの相続権を主張して男爵の鬻ぎを買収し、二人は絶交してしまう。家出後まもなく生活に行き詰ったヘンリー夫妻は、ラルフをスミズソン夫人に預けて、駆け落ち先のオランダへ戻ろうとしたが、道中で船の難破事故に遭遇して、夫婦共に帰らぬ人となってしまった。

息子に恵まれなかった男爵にとってラルフは、ヘンリーの主張どおり、ダーネル家の家督を継ぐべき存在に思われた。しかし、何とも困ったことに、ヘンリーとグレースがいつこの教会で、いかなる人物の立会いのもとで結婚の誓いをしたのかは公表されずじまいで、グレースが絹の袋に入れて持っていたとかいう「婚姻証明書」も行方不明のままであった。それ故、当時のイギリスの慣習に従えば、証人も証拠書類もない二人の結婚は無効であり、ラルフは「私生児」ということになる。<sup>3)</sup> 孫の行く末を案じたスミズソン夫妻は、男爵に娘夫婦の結婚の有効性を認めさせようと、「婚姻登録簿」に二人の名前がないかと方々

3) イギリスでは、1753年に制定された通称、ハードウィック婚姻法の施行以前には、教会結婚の要件や証人がなくとも、結婚の意思を言い交すだけで、有効な結婚とされていたので、ラルフの両親の結婚はあながち無効とも言えないはずである。おそらく作者は物語でこの結婚が問題になっている1755～57年とヴィクトリア朝のイギリスの婚姻にまつわる法律や慣習を意識して、二人の結婚を無効としているのであろう。ちなみに第61章では、フォスターとシビルの「グレットナ・グリーン婚」も問題にされている。イギリスの婚姻制度については、砂田卓士・新井正男編『英米法原理』（青林書院、1985）、319-338；度会好一著『ヴィクトリア朝の性と結婚』（中央公論社、1997）、63-72参照。

の教会を訪れたり、弁護士に相談をもちかけたが無駄足であった。そんな夫妻の心中を察するものの、男爵としては、「私生児」と見なされるラルフに家督を継がせることはできない。さりとて、スミズソン夫人の元から引き取って育てたラルフを路頭に迷わせるわけにもいかなかった。そこで男爵は、三ヶ月間報奨金付で弟夫妻の結婚情報を求めた後に効力を発するという執行猶予付きの遺言書をしたための：

もしこの青年〔ラルフ〕が嫡出子だったら——もし彼の父ヘンリー・ダーネルとウォークワースのグレース・スミズソンとの結婚が今、あるいはこれから先のいかなる時点でも、法律上必要な方法で、合法だと証明されたら——私は彼を私の弟の後継者でメルセペスの爵位相続人、即ち男爵の即位を継ぐべき男子相続人と認め、彼がメルセペスの財産である土地、金銭、あるいはその他のいかなる物でもメルセペスの財産と見なされるものの半分を受け取るように遺言する……

当分の間、即ち彼が嫡出子であることが証明されるまで……ラルフ・ダーネルは私の所有する財産から、私の父がかつて決定したヘンリー・ダーネルの相続分の年400ポンドを受け取ることになる。彼が成人した後は、さらに年400ポンドを加算するものとする…… (111)

18世紀中葉において、東インド会社の社員の平均年俸が150ポンドであることを考慮すると、<sup>4)</sup>年800ポンドといえ、ジェントルマンとして大邸宅を構えて華麗な生活を送るには不十分であったかもしれないが、働かなくても得られる収入としては有難く、家族を十分養えるような高収入であったろう。その上ラルフには、ロジャー・ダーネル会社の社員として得る給

料や投資による収入も期待できた。しかし問題なのは無論、相続財産の額ではなく、男爵の甥として人生を歩んできたラルフの個人的な名誉の問題であった。ある日突然、悪友のフォスターやロジャーの会社事務員ウィルソンから男爵の遺言書の写しを見せられ、出生の秘密を知ったラルフは「全世界に対して心が凍る」(141)ほどの衝撃を受け、「私生児」としての立場を何も知らされなかったことに、言いようのない憤りを覚える。それは正に屈辱的で親族一同による裏切り行為にも感じられた。折りしも、彼は幼い頃から思いを寄せていたコンスタンスが、飲み友達のエリオットと交際中だと聞かされ、あわてて彼女へ求愛して拒否されたところであった。そんな彼を男爵は嘲笑し、身持ちの悪いエリオットとコンスタンスとの結婚を考え直すようにというラルフの忠告を無視する。そればかりか、男爵は遺言書について切り出したラルフに怒って、「私生児」(bastard)という言葉を投げつけてしまう。二人は大喧嘩になり、絶交したような別れ方をする。

フォスターやウィルソンが「遺言書」の写しをあえてラルフに漏洩したのは、彼らがジャコバイトの政治活動をするセルウィンと共に、メルセペスの財産に寄生するためであった。彼らはラルフが「私生児」であることを知るや否や、婚姻証明書を偽造する話まで切り出すほど貪欲であった。遺言書が効力をもって、ラルフが莫大な財産を相続する可能性から遠ざかるのを、傍観することはできない。そこで3人はノー

4) 浜渦哲雄著『大英帝国総督列伝——イギリスはいかにインドを統治したか』(中央公論社、1999)、54参照。

サンバランドへ帰宅途中の男爵の馬車を襲撃して、ロンドンで作成した遺言書を取り上げてしまう計画をたて、ラルフの同意を得る。なるほど計画どおり馬車を襲撃して遺言書は奪ったものの、刀を抜いて抵抗した男爵にフォスターが発砲して重症を負わせてしまい、彼らの悪巧みは当局の追求を受ける物騒な強盗傷害事件となる。遠巻きにして傍観していただけのラルフも、思いがけない事件の展開に責任を感じて、男爵を救助しようと一たんは馬車に近づくと御者に発砲されて、フォスターらと共に逃亡してしまう。事の経緯を密告されたロジャーは、事件の全貌が明るみに出るのを恐れて、ラルフをインドへ連れて行くように知人のスクラフトン船長に頼む。事情を察した船長は、テムズ河畔をぶらついていたラルフを巧みに自分の船に誘いこんで、彼を無理やりカルカッタへ同行させる。

## II

ラルフがカルカッタへ送られる経緯を描いた物語の前半は、アングロ・インド小説として『ラルフ・ダーネル』を解釈すると、そのテーマとは直接関係がないように思われる。しかし、ラルフの出生にまつわる様々な問題は、18世紀半ばから19世紀にかけて、中流階級以上のイギリス青年がインドへ渡る動機として捉えることができる。それは、ロジャーとスクラフトンとの密談の場面に作者が付け加えたコメントによって裏付けられている：

私の物語の設定年代には、忌まわしい親類を突然ヴァージニアのイギリス植民地やカルカッタ、ボンベイ、あるいはマドラスにいる

友人のところへ追いやるのは、決して珍しいことではなく、それが発覚しても特に関心的にはならず、殆どのケースは称賛に値すると見なされた。それは若くて厄介な甥や親類、「私生児」に、イギリス本国では獲得できないチャンスを与えることになる。(187)

『ラルフ・ダーネル』が設定されている18世紀半ばのイギリスにおいて、ヴァージニア等の海外植民地が、「忌まわしい親類」あるいは犯罪人を送るための流刑地としての役割を果たしてきたことは、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660～1731) の小説等からも窺い知れる。そこではどういうわけか、イギリス本国で盗人や売春婦だった人物が、人並みの以上の生活を送るようになることも珍しくない。また無産者階級の人々の中には、積極的に植民地に渡って、農場主になったり、貿易に携ってジェントルマンに成り上がった者もあった。特にインドへ渡る人々の中には、本国では能力を発揮するチャンスや財産相続の恩恵に預からない、上流階級の次男以下の御曹司等も混じっていた。縁故を頼って東インド会社の社員になる子弟には、副収入もあって本国では得られないような高収入が期待できたし、学力が家柄が落ちる者は、会社所属の軍隊に入ってそれなりの収入と地位が獲得できた。さらに東インド会社に所属しない商人や船員にも、ありとあらゆる方法で、荒稼ぎするチャンスもあったようである。

自然環境や生活条件が劣悪で、生きて帰れる保証がないにもかかわらず、多くのイギリス青年がインドへ赴いたのは、帰国後の生活に不自由しない富を積んで帰国する可能性がかなりあった故であろう。その背景には、18世紀半ばまでには、植民地統治にかかわる仕事で、上流階級の御曹司

にふさわしい職業と見なされるようになり、ジェントルマンが商売に携わるようにもなったという社会的な事情があった。その傾向はインドがイギリスの植民地と化した19世紀にはいっそう顕著になったが、注目すべきは、テイラー自身も、ジェントルマン階級の息子に生まれながら、父親の商売の失敗のために、16歳で商人の見習いとしてボンベイに渡り、後にニザーム領を統治する軍人として立身出世を果たしたという事実であろう。<sup>5)</sup> ちなみに、カルカッタで生まれたサッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811~1863年) も、経済的に東インド会社と深い縁があり、アングロ・インド社会について多くを語った作家であるが、彼が描いたジョセフ・セドレーやニューカム大佐等は、植民地での勤務がなければ、周囲に当てにされる財産を築けなかったように思われる。なるほど『虚栄の市』(Vanity Fair, 1847-48年) や『ニューカム家の人々』(The Newcomes, 1853-55年) の中で、インドは単なる思い出やほら話の遠景のようにも感じられるが、当地での軍事・財政問題は、登場人物の経済的な状況や精神生活にかなり深く関わっているのではないだろうか。<sup>6)</sup>

以上のようなイギリスとインドの社会・経済的な繋りを考慮すると、ロジャー・ダーネルがラルフをカルカッタへ送り込むというのも、ごくありふれた話だと言えよう。即ちそれは、厄介者払いというよりは、ラルフにダーネル家との縁を顧ずに、独力で一旗あげさせようという目的をもつ

ていたのである。もっとも東インド会社の理事で、インドとの貿易取引も扱うロジャーにとって、社員のラルフを当地へ送るのは、いわば少々危険を伴う出向を命じるようなものだった。ラルフにしても、ロバート・クライヴをはじめ、叔父の会社に入入りする東インド会社の関係者や、インドで生じたトラブルを訴えるカルカッタの代理店からの文書は、関心の的であった。彼は、ロバート・クライヴに最初に出会った時からインドに誘われ、当地に興味を抱いてもいた。出生の秘密を知った後の彼の目に、インドで自らの力によって名声を馳せたクライヴがいっそう眩しく映ったのも当然であろう。そのために、ラルフは無理やりインド行きの船に乗せられたことを恨むこともなく、「ラルフ・スミズソン」として東インド会社のために活躍する覚悟を固める。

呼び名はともかく、「ダーネル家の人間で紳士でなかったものはいなかった」(219) という伯父の言葉が忘れられないラルフは、本国では味わえない解放感に浸って深酒や賭博にふけるといふ当時のアングロ・インド社会の悪弊に染まることもなく、できる限り品行方正な生活を送る。ロンドンで悪友と付き合い身持ちを崩したという苦い経験さえ、カルカッタでは良い教訓となった。確かに紳士的なマナーへの拘りは、俗悪な仕事仲間から遠巻きにされる原因にもなったが、東インド会社の役員ヘンリー・ウォートンのような支配階級の人々は、育ちの良さを感じさせるラルフに

5) Philip Meadows Taylor, *The Story of My Life*, ed. by his daughter (1877; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986), 1-15参照.

6) サッカレーとインドとの関係については、Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell University Press), 73-107参照.

好意を寄せる。そのような堅実な営業社員として平凡な日々を送っていたラルフが、最終的にロジャーの期待以上にインドで立身出世するのは、歴史的な事件に関与してロバート・クライヴに取り立てられたことによる。

### Ⅲ

ラルフがカルカッタへ上陸後、一年もたないうちに、ベンガル太守シラージ・ウダウラがイギリス側のウィリアム要塞の補強や公金横領犯の隠匿に怒って、大軍団を率いて攻めてくるという噂は、当地のイギリス人を脅かす。太守の軍5万人に対して、イギリス人の守備隊はわずか170人ほどで、その中には酷暑で体調を崩して入院中の者さえあった。オランダやフランスからの援軍も期待できず、勝ち目は全くなかった。しかし、イギリスの支配階級というプライドをもつ東インド会社参事会のメンバーは、敵前逃亡を恥じ、要塞を最後まで守り抜く決意をする。彼らの心の中には、ベンガル兵は生まれつき好戦的ではなく戦術にもたけていないので、イギリス兵の戦いぶりに恐れをなして撤退するだろうという楽観的な気持ちもあった。ところが、勇敢なロヒラ族の兵士たちを先頭にした太守の軍団との戦いは予想以上に激しく、ウォートン氏はラルフの目前で戦死し、イギリス側の守備兵には多数の死傷者がでた。そんな「戦いの現場」に生まれて初めて臨んだラルフは、臆することもなく、ノーサンバランドで鍛えた剣術の腕を

発揮する。「抑え難い興奮」の高まりは、彼に敵と刃を交えて受けた傷の痛みも忘れさせるほどであった：

ラルフ・スミズソンの力強い腕は、追撃に続く一騎打ちの戦いで功を奏した。それは、流血を伴った。まず、彼は敵を追いかけて、すぐ退却中の敵兵らの最後尾に追いつき、彼の民族的な全エネルギーと情熱をかけて彼らに突進した——ダーネル一族の血が彼の頭にかなり上ってきた…… (235)

こうして軍人魂に目覚めたラルフは、ウダウラの軍隊に包囲されて要塞内が恐怖や飢餓で混乱に陥り、司令長官のドレークまでが女子供と一緒に船で逃げ出す有様の中にあっても、最後まで踏みとどまる。遺書を書くほど絶望的な状況下で、砲壘を死守するのが彼が引き受けた役割であった。やがて休戦が成立して命だけは助けられるものの、まもなく彼は145人の捕虜と共に要塞内の「ブラック・ホール」と呼ばれる座る余地もない狭い牢に閉じ込められる。牢番への訴えや賄賂も虚しく、そこは同胞が次々に窒息したり押しつぶされて、結局23人しか生存できなかったと言われる生き地獄であった。<sup>7)</sup> そんな地獄の責め苦に会っても彼は、騎士道精神を忘れることなく、唯一の女性捕虜であったウォートン夫人を必死でかばってその命を救い、自らも持ち前の体力と精神力で極限状況を乗り越える。その体験とウィリアム要塞を最後まで守った功績を評価されたラルフは、その後ドレークからマドラスにいるロバート・クライヴに援軍を求める使いに出来る。

クライヴと久しぶりに再会したラルフ

7) この事件はイギリス側の作り話だという説もあるが、この数字は多数のイギリスのインド史家が支持している。Henry Dodwell, *Clive and Duplex: The Beginning of Empire* (1920; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989), 124参照。

は、まずインドへ送られた経緯を告白するが、過去の愚行を非難されるどころか、腹心の友としてクライヴから認められて信頼を得る。クライヴに言わせれば、やはり「自分の人生を切り開くためにイギリスを離れてインドにたどり着いた人間の大方は、今わの際や、人生最後の指図、あるいは胸に弾丸を受けて喘ぎながら昇天する時にしか告白できないような驚くべき過去をもっている」(294) のであって、ラルフの出生の秘密などはインドでは問題にならない。クライヴ自身が、シュロップ州の落ちぶれた地主階級の子息であり、学校教育にもなじまぬ乱暴な「はみ出し者」としてインドへ追いやられたことを考慮すると、<sup>8)</sup>ラルフに彼の姿が投影されるのであろうか。クライヴは本国では過少評価されて、持ち前のエネルギーを発揮できなかったラルフに自分の片腕となって共にインドで活躍するように勧める。

「クライヴ大佐のみに所属する独立した義勇兵」になることを承諾したラルフは、生き証人としてマドラスの東インド会社参事会でカルカッタの惨事を報告したり、ウダウラの軍団に対する戦法を助言する。その甲斐があつて、クライヴは東インド軍の指揮官としてベンガル遠征に向うことを参事会から許可される。クライヴと共にフーグリー河にさしかかったラルフは、一年ほど前に「せいぜい商人になればいいつもりで」河を上ってきた「未熟で名もなき若者」の自分が、「軍人としての栄誉を思いがけず獲得した」ことに万感の思いを抱く。「彼

は多くのイギリス国軍の士官からも敬意の眼差しで見上げられ、クライヴ大佐の補佐役という地位によって、ますます一目置かれるようになった」(298)。クライヴの期待どおり、ラルフは10倍以上の兵士をもつウダウラの軍団に怯まず、イギリスの覇権を奪還するために命がけて戦う。その戦いぶりは相変わらず向こう見ずで、敵との小競り合いの際に負傷してあやうく切り殺されかけるが、ウィリアム要塞の攻防戦の折に助命したウダウラの愛妾ソザンに助けられ、ロヒラ軍の陣地で介抱される。そこで敵軍の内部抗争やウダウラの評判の悪さを察知した彼は、イギリス側の勝利に自信をもち、ブラッシーを目前にウダウラに戦いを挑むべきか躊躇するクライヴに次のように、攻撃の開始を促す：<sup>9)</sup>

ああ、クライヴ殿、私が耳にした民衆の話をあなたが聞かれたら、それだけであなたはためらわないでしょう——ためらうことはできないと思います。神が私たちについています。イギリスの名誉のために、私は身分は低いです、あなたに進軍するよう懇願します。もし今、ロバート・クライヴが背を向けたら、イギリス本国で何と言われるでしょうか。(338)

このような神がかり的なラルフの言葉が天に届いたのか、どしゃぶりの雨がベンガル軍の弾薬を濡らしたおかげで、戦況はイギリス側に有利に展開してウダウラは逃げ出し、ブラッシーの戦いはあっけなく幕切れとなった。そしてラルフはムルシダバードの太守の宮殿に幽閉されていたウォートン夫人とウダウラの正妻ヌール・ウニサを

8) クライヴの伝記的事項については、*The Dictionary of National Biography*, ed. by Leslie Stephen & Sidney Lee (1913; rpt. London: Oxford University Press, 1993), IV, 564–76. を参照した。

9) 実際にクライヴに攻撃を促したのは、アイル・クート (Eyre Coote) であったと言われている。ブライアン・ガードナー著、浜本正夫訳『東インド会社』(リプロポート, 1989), 101参照。

救出し彼女たちから救世主として称えられるようになる。しかし、戦場で出会った同郷の兵士で、かつて両親を乗せた船の船頭であったドレヴァーから思いがけず二人の結婚証明書を手にした彼は、勝利を祝う間もなく、その証明書の記載事項の確認のために一時帰国する。

ロジャー伯父の協力もあって、両親が式を挙げたとされるノーサンバランドの一寒村ラッカーの教会は難なく探し当てられる。しかしその婚姻登録簿に両親の名前はなく、証明書に記載されている牧師の名は偽名で、挙式をしたのは村に居ついたならず者だということが判明する。確かに両親の間には結婚の合意があり、ラルフは紛れもなく二人の間でできた子供であった。しかし結婚証明書が偽物で、生涯「私生児」と公に見なされることが決定的になったラルフは、再び失意のどん底に突き落とされる。ダーネル家の親族たちもラルフをますます不憫に思うが、なす術を知らなかった。しかし、クライヴから「男爵」の地位を追いかけることの愚かさを諭されたラルフは、再びインドへ渡る決心をし、20年の歳月を軍人として勤務する。そして最終的には將軍の地位と莫大な富を得て帰国し、20年余りジェントルマンとして何不自由ない暮らしをロンドンで送る。その間に彼は東インドの理事に任命され、インド人の利益になる政策を実現しようと努めた。

#### IV

主人公の出世物語に注目すると、『ラルフ・ダーネル』は、本国では成功の見込み

のないイギリス人が新天地になり得る植民地をインドに建設したことは、イギリス人に、またインド人にも利益をもたらしたというような印象を受ける。架空の人物ラルフはさておき、実際にはインドを踏み台として「ネイボップ」となったクライヴに対して、テイラーには非難と称賛の入り混じった複雑な感情があったように思われる。もともと帝国主義が最高潮にあった19世紀後半のイギリスにあって、クライヴが築いた富と名声は、イギリスの商業活動を守ってインドに繁栄と秩序をもたらした功績への報酬であったというような見解、即ちイギリス植民地主義のイデオロギーを作者は無視できなかったに違いない。確かにクライヴはもともと商売にはあまり興味がない軍人タイプの間で、軍事教練や綱紀肅正によってベンガルの東インド会社軍を強化したり、東インド会社の社員が賄賂を受け取ることや私的な貿易に従事することを禁じてそのモラルの向上を図ったと言われる。その業績自体は、イギリスのインド史家のあいだで、一般的に評価されている。しかし彼が、新太守に据えたミール・ジャファールから報奨金として23万ポンド以上を受け取ったとは、あまりに法外な話ではないだろうか。プラッシーの戦いにしてもその勝利は、神風のおかげと言うよりはクライヴの陰謀——ヒンドゥーの有力な銀行家オミチャンドを仲介者として、ウダウラの義理の大叔父にあたるミール・ジャファールを寝返らせるという謀略——が功をなした結果であり、およそイギリス軍の武勇に帰せられるものではなかった。この件に関して、『ラルフ・ダーネル』の中では、クライヴがオミチャンド

にウダウラの財産の5%を譲るともちかけて、その陰謀を成功させたことが史実に基づいて語られている。<sup>10)</sup> またテイラーの『研究者用のインド史マニュアル』には、クライヴが赤と白の二枚の証書を用意し、オミチャンドに渡した偽の赤い方には彼の取り分を裏書きし、本物の白い証書にはそれを記載しなかったこと、さらに偽物に署名するのを拒否したワトソン副司令官のサインを部下に代筆させたことまでが詳しく触れられている。<sup>11)</sup> なるほど歴史家としてのテイラーは、クライヴが「太守の財宝の20万ルピー分を節約するために……故意に卑しい裏切りをした」と遠慮なく非難している。にもかかわらず、物語には次のような矛盾したコメントが加えられてもいる：

どのような状況で、銀行家のオミチャンドが略奪品の取り分を求めて参上し、契約を取り交わした連中やクライヴ氏たちが所有していた本物の白色の証書を見せられて、彼との契約は偽りだったと宣告され、取り分が何もない羽目になってしまったのか。その時、年代記の中で語られているように、オミチャンドは怒りで青ざめ、激怒して帰宅し、まもなく怒り狂ったままで他界してしまった……私は故意に読者を、そのような陰謀の迷路に案内してこなかった。クライヴ氏は、その陰謀の迷路の中で、戦略には戦略を詐欺には詐欺をもって対処し、真実だと公言されても、上辺だけで中身は背信的だと分かっていた集団に対しては陰謀が正当化されると考えたし、彼にはその当時そういう風に思えただろうから……

私は、クライヴ氏の弁明とは無関係である。しかし、私にはあれほど高貴で勇敢だった人物が、偶然にも彼の行く手に出現した腹黒い輩のオミチャンドをどれほど恐れるべき

であったのか分からない。私はこのような国政にかかわる問題には関係がない。それは既に不滅の歴史書の中で語られているし、この取るに足らないような物語の能力を超えた問題である。(366)

このように物語作家としてテイラーがクライヴに寛容であるのは、クライヴがインド統治に尽くそうとするラルフの精神的指導者として理想化される必要があったためであろう。即ち、クライヴを見習ってラルフがインドへ雄飛し、後に理想的なインド統治者になるという物語の展開のためには、「ラルフにはクライヴの欲望が見えず、クライヴのように政治に関して真実を理解し、必要な決断力や堅実さで危機を乗り越えてイギリスに利益をもたらした人物はいなかったと思われる」(400) ようなクライヴ像を創造しなくてはならなかった。それ故、1867年に帰国したクライヴが、蓄財の法外さとその取得手段を議会から非難されたり、アヘン中毒になって自殺と見なされる最後を遂げたという史実は殆ど語られていない。なるほど長年インド統治にかかわって健康を害したテイラーは、インドで心身共に消耗して早世したクライヴに同情を禁じえず、物語に登場する彼を理想化したくなつたとも考えられる。しかし、この問題に関して注目しなくてはならないのは、クライヴが採った手段やイギリスのベンガル制覇を弁明するあまり、彼に敵対したウダウラが、排除されるべきスケープゴートとして描かれているという事実である。換言すれば、ウダウラの残虐性が強

10) *The Cambridge History of India*, ed. by H. H. Dodwell (Cambridge: Cambridge University Press, 1929), V, 141–49 参照.

11) Philip Meadows Taylor, *A Student's Manual of the History of India* (1870; rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1986), 432–32 参照.

調されればされるほど、彼を敗走させたクライヴやラルフは「正義の味方」のように感じられるために、『ラルフ・ダーネル』はイギリスのベンガル支配を正当化するプロパガンダ的な小説という印象を免れないのである。こうした印象は、ウダウラから虐待されたり、最終的にイギリス側につく土民が本質的に善人として性格付けられていること——ウダウラ＝悪／ソザン、ヌール・ウニサ＝善という二項対立的な土民の分類——によっても強調されている。

## V

シラージ・ウダウラの性格が、実際にどのほど残虐であったかは、彼についてのインド側の資料が少なく想像し難い。プラッシーの戦い当時のイギリス側の見解によれば、「彼はあらゆる階層の人々から一般的に憎まれていたし、士官を虐待するので軍隊からも疎外されていた」<sup>12)</sup> そうである。このような見解は、『ラルフ・ダーネル』にも反映され、ウダウラは愛妾のソザンの目にも「残虐で強欲、執念深く横柄で無謀」と映る暴君として物語に登場する。

芸者置屋から身請けしたソザンに夢中になったウダウラは、飽きて必要なくなった正妻ヌール・ウニサを宮殿の一角に幽閉していた。彼女は何の落ち度もない高貴な生まれの美しい女性であったが、ウダウラとの結婚そのものは親族一同の勧めによるものであって、彼の意思からではなかったという。それにしても、あまりの横暴さに、彼を手玉にとっている実感するソザンさえ、一度彼のご機嫌を損じたり、他

の女が彼の気を引けば、どんなひどい目にあっても仕方がないと悟っている有様であった。実際にソザンは、ブラック・ホールから解放されたウォートン夫人を匿ったことが発覚した折に、彼から短剣を投げつけられた上に、鎖につながれて半年間も幽閉されてしまう。ソザンが夫人を隠したのは、美しい彼女がウダウラの欲望の対象になって、自分が捨てられるのを恐れたからであった。ところがウダウラは、彼女から何の弁明も求めず、ウォートン夫人までも宮殿に軟禁してしまう。

ウダウラの放蕩ぶりや女性虐待のみに注目すると、3人の女たちが後に無事に解放されるためか、彼は王妃を次々に取り替えたり、処刑台に送ったヘンリー8世を凌ぐほどの暴君には感じられない。確かに彼が捕らえられて引き回される場面には、娘二人を奪われて彼に毒づく土民の母親が登場したりもするが、その娘たちについて詳細は全く語られていない。またウダウラは、捕虜にしたウォートン夫人の意思に反して彼女の肌に触れるほどの好色漢としては描かれていない。しかし、そんな彼も、イスラム修行者の星占いによる不吉な予言や意見に対しては、その両耳を削がせるほどの残虐性を発揮する。ウダウラにとって、イギリス軍に最終的に敗北するという不吉な予言も癪に障ったが、修行者が病で倒れた時にイギリス人によって手厚い看護を受けた体験を基に「イギリス人たちに気をつけろ、彼らを傷つけるな、彼らは本当に正義感があつて誠実である……私は彼らを尊敬する」(217)と発言したことは許せなかった。君主に楯突くとはいえ、修行

12) *The Cambridge History of India*, 148.

者は神に仕える身であり、民衆からは予言者として尊敬されていた。そんな彼にウダウラが与えた野蛮な罰は、東洋的な暴君の残虐性の象徴として捉えられる。

暴君としてのイメージの他に、ウダウラがもう一つの顔は、臆病者である。イスラム教徒の彼に、ベンガルのヒンドゥー教徒の特徴とされる臆病さがあったかどうかはかなり疑問であるが、作者は19世紀のアングロ・インド社会の一般的な見解——好戦的なアフガン人は魅力的で、非戦闘的なベンガル人は称賛に値しない民族であるというような意識<sup>13)</sup>——を反映させたのであろうか。物語の中では、アフガン兵士を父にもつソザンが、及び腰だったウダウラをイギリス側と本気で戦うように扇動したり、彼女が率いるロヒラ軍の活躍によってウィリアム要塞は攻め落とされるのである。後方に陣取っていたウダウラは戦闘の指揮を取ることもなく、戦いの最中に昼寝をする始末で、イギリス軍と刀を交えるのも、ソザンや彼女の同胞だった。即ち、ウダウラ自身の人望や軍事能力は、イギリス側の敗北とは無関係だったということになる。だが、勝利によっていっそう傲慢になった彼は、ロヒラ軍に恩賞を与えるどころか、彼らの士気を高めたソザンを些細なことから幽閉してしまう。そうかと思えば、戦況が不利になると、怖気づいた彼は勇敢なソザンが自分にとって不可欠な存在であることを再認識し、彼女を解放してその許しを乞う。

「お前しかいない」と頼るウダウラは、ふがいないともソザンには憎めないのだあ

ろうか。彼女は自分に協力を求める彼を「軽蔑と挑発」の眼差しで見つめつつも許して、ロヒラ軍との交渉役を引き受け、再びその陣頭に立ってイギリス軍と戦う。彼女には民衆の言動からベンガル側の敗北が予感できたが、ウダウラを見捨てる気持ちにはなれなかった。彼と最後まで運命を共にする決心をした彼女は、ブラッシーの戦場から敗走してうろたえるウダウラを引きずるように船に乗せて、共に逃亡する。しかし命を賭けた彼女の献身も虚しく、すっかり士気を失ったウダウラは、かの耳を削いだ修行者に抵抗もせずに捕まって、民衆の嘲りと罵倒を浴びつつカルカッタに連行される羽目に陥る。

ウダウラの必死で助けを求める声に、道中の民衆の中には同情を寄せる者もあった。しかし復讐心に燃えていた修行者は、自分の胸を短剣で切って彼らに呪いの血をふりかけると脅したり、彼に魔女扱いされて焼き鋺を当てられた老女や、二人の娘を奪われたという母親の叫びを聞かせて、ウダウラをイギリス側に引き渡すことに同意させる。結局ウダウラは、ムルシダバードの宮殿の駐在官ウィリアム・ワッツの判断によってミール・ジャファーに引き渡され、彼の息子によって処刑されてしまう。そのようなスケープゴートの儀式の過程は、次のように長々と数ページに渡って描かれている：

……修行者は片手でシラージ・ウダウラを押さえつけ、彼を刺し殺そうとするかのようにもう一方の手を挙げた。「臆病者！」と修行者は叫んだ。「もしお前が死ぬことになっているなら、男らしく運命に耐えろ。お前の慰

13) この点に関しては、Allan Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960* (London: Oxford University Press), 46-51 参照。

み者〔ソザン〕でさえもっと勇気があるようだ。」彼は粗末な寝台用の担架を持ってきた村の若者たちの何人かに話を続けた。「奴を命がけで護送することをわしに誓え、わしの流した血にかけて！」

「俺たちは誓う！」と50人のざわめく声が出た。しかしその必要はもう殆どなかった。

新たな興奮を抑制するチャンスはなかった。「奴を片付けろ」と老いも若きも叫んだ。「奴をイギリス人のところへ連れて行け。ミール・ジャファーのところへ連れて行け。」

「私は彼の命令でヤケドを負わされた」と一人の老女が叫んだ。「皆から魔女だと言われたせいで。傷跡を見てくれ。市場で熱い焼き鰻が私を焦がした。私の体から出た煙が彼を告発する証拠としてのぼる。呪いながら彼がどうなるのか見届けてやる」……

翌日彼らが都に近づくにつれ、ウダウラを乗せた担架の後を追ったり、その先を歩んだり、担架と共に行進したりする群集の数はどっと増えた。男たちは相変わらず、誰が担架を担ぐかで喧嘩をしたり、担いでいる男たちは他の者にその役を譲るために押しのけられた……

「ああ、ワッツ、ああ、ワッツ、助けてくれ！——助けてくれ！——奴らは、俺を殺してしまふ。わしの財産を全部持っていけ——宝石を全部。それでわしを解放してくれ！ああ、ワッツ、お前の母親、ナザレのキリスト、聖母マリアにかけて俺を助けてくれ——それが太守だった！かのシラージ・ウダウラであった！彼を見ていると気分が悪くなった…… (368-69, 371-72)

ウダウラの悲惨な最期は、ブラック・ホール事件が忘れられなかったイギリスの読者にとって溜飲の下がるものだったであろうか。彼が最終的にはイギリス人ではなく、民衆や親族の手によって成敗されるという顛末も天意として捉えられたに違

ない。しかし、本当に彼はスケープゴートにふさわしい「イギリス人ばかりではなくインド人にとっても全く褒めるべきところがなかった」<sup>14)</sup> 暴君、あるいはイギリス軍人に命乞いをするような臆病者だったのであろうか。

『ラルフ・ダーネル』の中のウダウラにまつわるエピソードは、どこまでが史実に基づいているのか定かではない。確かに、両耳を削がれた修行者が、逃亡中のウダウラを捕らえてイギリス側に差し出したとか、逃亡の際に愛妻の一人を道連れにしたという話は、ロバート・オーム (Robert Orme) の史書を基にして創作されたヘンティ (G. A. Henty 1832~1902年) の『インドのクライヴと共に』 (*With Clive in India*, 1884) にも言及があることから、全くの虚構とも言えないだろう。<sup>15)</sup> しかし、「その愛妻の一人」であるはずのソザンは、ウダウラの臆病さを浮き彫りにするために創造されたありそうもない人物であるし、彼の正妻やブラック・ホール事件の唯一の女性生存者が幽閉されていたといったような話は、ウダウラの残虐性とラルフの騎士道精神を対比させるための虚構であろう。<sup>16)</sup>

ウダウラの敗走に関して、その原因を民衆に憎悪されるような彼の性格に求めるのは、スケープゴートの儀式を正当化するための方便であったと言えよう。そもそも彼は、プラッシーの戦い当時、その優柔不断さ、判断力のなさを責めるには若すぎる

14) *The Cambridge History of India*, 141.

15) G. A. Henty, *With Clive in India, or, the Beginning of an Empire* (London: Blackie, n.d.), 298参照.

16) ブラック・ホール事件の唯一の女性生存者は、メアリー・ケアリーという女性で、事件後にムルシダバードに連行されてしばらく監禁されたのは、彼女ではなく、ホルウェルと3人の士官だったと言われる。ガードナー、前掲書、89-90参照.

25歳前後の若輩であった。また祖父アリヴァルディ・カーン (Alivardi Khan) から太守の座を譲られたものの、その地位を妬む伯母や従兄弟たちとの争いは絶えず、彼はその内紛をイギリス側に利用されて廃位させられたとも考えられる。物語の中では、彼の母親がイギリスびいきであることが繰り返し仄めかされているが、実際にそうであったのは彼と太守の座を争った伯母のガスティ・ベガム (Ghasti Begum) であったと言われる。彼女のクーデター計画を察知して未然に防いだり、従兄弟シャウカト・ユング (Shaukat Jung) の反乱を鎮圧したウダウラは、それほど無能でも優柔不断でもなかったのではないだろうか。<sup>17)</sup> またブラッシーの戦場から逃走したのも、グプタが指摘するように、配下のラムナライン (Ramnarain) に援軍を求めるためだったとしたら、<sup>18)</sup> 彼を「臆病者」とも呼ぶのも過言であろう。このような歴史的な状況を考慮すると、テイラーの描いたウダウラに関するマンスクハニの次の批評は、19世紀のイギリス側の偏見のない妥当なものと言えよう：

太守のシラージ・ウダウラは、テイラーが描写するほど暴虐でも放蕩でもなかった。彼はブラック・ホール事件に対して責任はない。それは全く彼の下士官の鈍感さのために起きたのである。ブラッシーでの彼の敗走は、様々な理由による。彼の陣営内外で裏切り行為があったことも影響した。太守は「怪物あるいは殉教者」ではなかった。彼には危機に面した時に、エネルギーや決断力が欠けてい

たのである。また運が悪かったことも明らかである。<sup>19)</sup>

## VI

『ラルフ・ダーネル』において、イギリス人ラルフやクライヴとウダウラの差異が明確に描かれ、後者の転落と共に、イギリスのベンガル制覇の正当性が確認されるとすれば、この物語は、同様にブラッシーの勝利やクライヴと共に行動した少年主人公の活躍を謳歌したヘンティーの『インドのクライヴと共に』とさほど変わりばえのしない小説ということになる。しかし、『ラルフ・ダーネル』の「おち」と言うべき主人公とウダウラの正妻との結婚は、ヘンティーが考慮しなかったイギリスとインドとの関わり方という問題を提起している。

ラルフがソザンの仲立ちによって、ヌール・ウニサを妻に娶るという後日談は、彼の義侠心を強調するための荒唐無稽なエピソードのようにも感じられるが、1790年代になるまでは、インド在住のイギリス人がインド女性を妻にすることは珍しくなく、東インド会社も「軍隊の拡大を目的として意図的に異人種間の結婚を奨励する政策を採用した」<sup>20)</sup> と言われる。確かに、イスラムやヒンドゥーの女性がキリスト教徒の男性と結婚するのは、宗教的な戒律にそむくことではあるが、実際には良家出身の控えめで美しいインド女性は、イギリス支

17) シラージ・ウダウラの伝記的な事項や彼と親族との争いについては、Gupta, Brijen K., *Sirajuddaullah and the East India Company* (Leiden: E. J. Brill, 1966), 143-45を参照した。

18) *Ibid.*, 121-22参照。

19) Mansukhani, *op. cit.*, 155-56.

20) ロナルド・ハイナム著、本田毅彦訳『セクシュアリティの帝国——近代イギリスの性と社会』(柏書房, 1998), 157.

配者にとって魅力的な存在で、しばしばインドの厳しい環境に耐えられないイギリス女性よりも好ましい伴侶となった。

ラルフが、若くて美しいばかりではなく、忍耐強く優しい性格をもつヌール・ウニサとの結婚話に関心をもつのも不思議ではない。彼は「私生児」という身の上で、イギリスの上流階級との良縁を望むことはできなかった。またインドに到来するイギリス女性は、ホームシックや病気にかかりやすく、当地で結婚しても単身、あるいは子供連れて帰国してしまいがちであった。そう思うとインドに滞在し続ける決心をした彼にとって、高貴でそれなりの教養をもつインド女性を配偶者にするのも、悪い話ではないような気もした。無論、再婚とはいえ名門出身のイスラム教徒のヌール・ウニサに求婚すれば、「彼女一族にとっては侮辱になるだろう」(436)という不安もあった。ラルフ自身が同胞から嘲笑されることも予測できた。そんな気持ちを抱えながらも、彼はウダウラの母親の勧めもあって、ヌール・ウニサに思い切って求婚し、本人の承諾を得る。クライヴやミール・ジャファールの同意も得た彼は、ヘースティングズを証人に立て、アラールとキリスト双方の神に誓いを述べて、内内で彼女との結婚式を挙げる。予想通り、土民の中には彼女を嘲笑する者もあった。「高貴な家柄の出の彼女がヨーロッパの毛唐と結ばれるのは墮落であり、彼女と同等の身分の男性の妻となった者たちは、

彼女を見下したり、取り込んだりしようともした」(443)。しかし、彼女はそんなことを気にかけることもなく、ラルフの出陣に同行したり慈善事業に尽くし、庶民からは慕われる存在となる。ラルフにしても、「彼独特の静かな様子だったが」、「自分の選んだ〔ヌール・ウニサ〕と人生を送ることができて、たいそう幸せだった」(441)。彼女のペルシア語や土民の風俗習慣に関する知識も、インド統治の仕事に役立った。「彼には現場で忙しく仕事に励んでいる時も、家庭で楽しい静かな生活を過ごす時も、妻の深い思いやりと実践的な協力があつた」(442)のである。

ラルフとヌール・ウニサのような結婚は、実際に18世紀後半のインドにおいては、確かに幸福に結びついたり、それなりの価値も認められていたようである。ラルフのモデルとなったウィリアム・パーマー将軍も、若き日にイスラム教徒の愛妻と、彼女との間にできた3人の子供たちに囲まれて幸せそうな様子が肖像画(1785年製作)<sup>21)</sup>に描かれて、有名になったほどである。しかし19世紀になると、インド統治の方針は変更されて、イギリス人とインド人との間は一線を画されるようになり、パーマー将軍のような結婚は次第に白眼視されるようになった。無論、40年間ほどインド統治に関わったテイラーは、現地妻が本国では正妻と認められず、欧亜混血児がイギリス、インド双方の社会から差別されるといったような弊害を認識していた。

21) この有名なウィリアム・パーマー将軍の肖像画は、最近出版された William Dalrymple, *White Mughals* (London: Harper Collins, 2002) のブックカバーとなっている。その他に我が国の出版物では、佐藤哲正〔他〕著『世界の歴史14—ムガル帝国から英領インドへ』(中央公論社, 1998), 285; ハイナム, 前掲書, 157にも、その肖像画が掲載されている。*White Mughals* には、肖像画の解説や、パーマー将軍とファーイズ・バクシュ (Fyze Baksh) との結婚生活についての記述もある。

その為にイギリス男性とインド女性との結婚について、彼は次のような意見を差し挟んでいる：

私はそれについて、反対あるいは賛成しつつ論じるわけではない——それが正しいとも間違っているとも言わない——ただ、イギリス人がインドで生活するようになった当初——そのイギリス人たちは権力があって地位も高かったが——ラルフ・スミズソンのような結婚をした者も多く、それは彼の様な事情からであった。それはそれで構わないだろう。彼らのような夫婦は、概して幸福だった。インドには結婚の対象になるイギリス女性がいなかったのである……私の記憶には、かなり後世になって描かれたゾファニーの絵が残っている。その絵の中では、当時のフリルとレースのついた赤い軍服を着たイギリス紳士が、東洋の部屋で低い長椅子に座っていて、簡素な白いモスリンの民族衣装を纏って地面に腰を下している美しい婦人から、とても幸福そうで彼を信頼し愛している眼差しで見上げられていた。その絵はとても素晴らしく描かれていて、私は強烈な印象を受けた。それから何年もたった。しかしその絵は、グラントン・タワーのダーネル家を描いた肖像画であるかのように、私の記憶に浮かぶ。それは、多分ラルフ・スミズソンと彼の妻ヌール・ウニサだったのであろう。私はそう考えたかった。(441)

ウィリアム・パーマー将軍の孫娘で欧亜混血の血が流れる女性メアリー・パーマーを妻にした<sup>22)</sup> テイラーは、19世紀のイギリス人一般よりもインド人に対する差別意識が少なかったと言えよう。それは彼の様々なインド人の円球人物的な描き方からも窺える。インド人を理解しようと努めた彼は、無論インド統治の理念と現実との

ギャップを無視することができなかった。イギリスのインド支配そのものは「神の計り知れぬ意思である」(450)と確信していた彼にとって、インド統治に専念してその文明化に貢献するイギリス支配者は称賛されるべき存在であった。しかし、イギリスの方針が必ずしもインド人の意にそぐわず、彼らの利益にも結びつかなかったという問題は、彼の他の小説においても取り上げられている。『ラルフ・ダーネル』の中では、東インド会社の手前勝手な商法や「ネイボップ」に対する批判的な叙述は殆どないが、ラルフの永久帰国を通してイギリス側のインド統治のあり方に波紋が投げかけられている。

ラルフが20年間インドで勤務した後に、永久に帰国する決意を固めるのは、イギリスのインド統治のあり方が次第に彼の意に染まないような方針を取るようになったからである。それは、物語の中では具体的にどのようなことか指摘されていないが、時代設定から想定すると、土民の利益を無視したイギリス側の飽くなき領土の拡大や、徴税権さえ獲得してインドから富を吸い上げようとした方針等であろうか。「公私にわたって諫言しても何の効果もなく……若い世代の支配者や競争者が前世代の人々よりも賢いと思っている」(443) ことに失望したラルフは、「もはや自分の時代は過ぎた」ことを悟ってインドを去る。

イギリスに戻った彼は、インドでの功績を称えられ、親族や友人から歓迎される。東インド会社への投資等で蓄えも余るほど

22) テイラーは、ウィリアム・パーマー将軍の同名の息子で、ハイデラバードに商事会社を設立した人物ウィリアム・パーマー (William Palmer, 1780–1867) の娘メアリー・パーマーと1829年に結婚した。Mova Sarada, *Anglo-Indian Novel: Philip Meadows Taylor* (New Delhi: B. R. Publishing, 1995), 26参照。

あった彼は、ダーネル男爵からメルセペス付近に所領をもつように勧められるが、東インド会社の仕事もあり、ロンドンで邸宅を構えてジェントルマンとしての生活を送る。以前は「私生児」を遠巻きにした社交界も「將軍」にまで出世して大金持ちになったラルフを持ってはやすようになり、彼の自宅には各界の名士が出入りするようにもなる。彼には、子供がいなかったが、インドに滞在中にシビルの遺児を養子にする手続きがしてあったので、将来の遺産相続についても心配がなかった。ただ一つ彼の生活について、不可解だったのは邸宅内に開かずの間があって、そこへは掃除のために使用人が立ち入ることも禁止されていた。その部屋には何と20年もの間、インドから連れてきたヌール・ウニサが暮らしていたのであるが、彼女の存在が初めて明るみに出るのは、ラルフが彼女の後を追うように他界する時である。

アングロ・インド小説の一般的な筋書きの様に、イギリス男性が帰国する際に現地妻を離縁するとか、それ以前に戦争や病気によって彼女を葬ってしまうのは、婚姻制度という問題を提起する『ラルフ・ダーネル』の終幕にはそぐわないように思われたのか。あるいは作者は、クライヴの時代に公認された異人種婚を、19世紀のインドやイギリスを舞台にした小説にならって、便宜的に破綻させるのを躊躇したかもしれない。それはともかく、興味深いのは19世紀後半の読者がロンドンのラルフ・ダーネル邸内の「一家の秘密」をどのように捉えたかという問題であろう。名誉を守るために、ラルフがヌール・ウニサに対してとった処置は必要悪だと解釈されたかもしれないし、慰謝料でも払って彼女をイ

ンドへ置き去りにした方が、賢明であったというような意見もあったはずである。また、いかなる理由であろうと、支配階級のラルフがインド女性とロンドンで秘密に結婚していること自体に、嫌悪感を覚えた読者もあっただろう。そのような読者は二人の間にできた子供が、インドで生まれて間もなく他界してしまったことに安堵感を覚えたに違いない。現代的な観点からすれば、たとえヌール・ウニサが隠遁生活を好むイスラム女性であっても、外の世界や夫以外の人間から切り離された生活に甘んじられたとは思えない。彼女がどのような思いで20年という歳月を過ごしたかは全く語られていないが、その隠遁生活は、ウダウラから強制された幽閉生活とかなり符合すると言っても穿ち過ぎではないだろう。

ヌール・ウニサへの対応に限り、ラルフとウダウラの差異が結果的には多少なりとも曖昧になると解釈すれば、物語の結末は、イギリス人のインド人に対する関わり方についての問題を提起している「おち」とも言えよう。ラルフとヌール・ウニサのロンドンでの結婚生活は、確かに不自然ではあるが、異人種間の結婚が公に認められないようなイギリスの社交界、しいては人種差別的なインド統治への抵抗のようにも思われる。美しくも不可解な二人の結婚生活の終焉は、一見したところ、人種や信仰を超えた愛の絆を称えるロマンスの終章という印象を受けるが、皮肉な見方をすれば、彼女をイギリス社会で日陰者扱いしたことへの贖罪のようにも感じられる：

東洋の香水や香辛料の香りのようなかすかな匂いとその部屋には漂っていた。ベッドの上には、豪華な金銀の装飾が入ったインドの

モスリンの衣装を纏った女性が静かに横たわっていた。彼女の周りには数本のバラが散らばっていて、顔の近くにも一本のバラが置かれていた……その側で、静止した背の高いラルフ・ダーネル将軍がベッドにもたれかかっていた。彼の片方の手は、そこに永遠に眠る彼女に向って差し出され、もう一方の手はまだ何本かのバラを握っていた。彼の頭は、太陽の光が戯れるようにその柔らかな白髪の中あたりを照らしていたが、バラを握っていた手の上に乗せられていた。それは、生前に彼のためだけに鼓動していた心臓の近くにあった。彼の赤らんだ唇は、明るく優しげに笑みを浮かべていた。ぼんやりした彼の眼差しは、近くにある彼女の顔に向けられていた。しかし、彼の息は絶えていた。召使が聞いた音は、ラルフ・ダーネルの最後のため息だった。

二人は彼が書き記して依頼したとおり、密かに一緒に埋葬された。(449)

## おわりに

『ラルフ・ダーネル』の意外な終幕には、作者の19世紀イギリスの婚姻制度に対する批判精神が窺える。インドでは公認されたラルフとヌール・ウニサの結婚生活は、イギリス本国においては、受け入れられないものであった。両親の結婚すら、婚姻証明が不備だというだけで「私生児」扱いされたラルフには、インド人のヌール・ウニサが正妻としてロンドンの社交界で認められないことが十分認識されていた。そんな彼があえて彼女をイギリスに同行したのは、イギリスの婚姻制度と人種差別的なインド統治政策に対する暗黙の抵抗とも言えよう。最後まで首に両親の偽の婚姻証明書の入った袋を巻きつけていたラルフは、結婚というものが「形式」や「手続き」によって成り立つものではなく、愛と信頼によって結ばれた夫婦なら、人種や宗教、身分の差も乗り越えられると悟って

いたに違いない。テイラーにとって、愛するインドの女性と添い遂げようとしたラルフのようなイギリス人こそ、インド統治にふさわしい人物に思われた。しかし彼の時代には、もはやそのように考えるイギリス支配者は稀であった。ラルフを真のインド女性の解放者として描くことは憚られた。イギリスは、結果的にテイラーが望まなかったようなインド帝国を築いてしまったのではないだろうか。